

〔書評〕

鳥木圭太著『リアリズムと身体

——プロレタリア文学運動におけるイデオロギー』

大和田 茂

五、六年前、世の中では小林多喜二の『蟹工船』が歴史の中から甦り再評価が行われたり、各種メディアでもかなり話題になって、漫画本が発刊され、新しい映画や演劇の公開などがあいついだ。その影響で、それまでずっと文学研究の片隅に追いやられた感があつたプロレタリア文学ということばやそれら作品にもそれなりに注目が集まつたが、そのブームも去り、現在、格差社会、貧困はいっそう拡大しているにもかかわらず、プロレタリア文学再評価の動きは停滞気味といえる。

そんな中で、昨年（二〇一三年）七月、「立命館大学文学部人文学研究叢書3」として本書が風間書房から上梓された。久々の本格的なプロレタリア文学研究書の出現といえる。「リアリズム」「プロレタリア文学運動」「イデオロギー」など、二〇世紀前半まで当たり前のように使われていた文学用語を、堂々と書名に掲げながらも、「身体」という比較的新しい知の領域を導入して、独自のプロレタリア文学再検討が展開されている。しかも、佐多稲

子、葉山嘉樹、中野重治、小林多喜二、窪川鶴次郎など、プロレタリア文学史上高い峰をなす作家・作品を対象にして、リアリズムという山脈の意味を問うている。果敢な挑戦である。以下、各章を読み解きながら、気づいたことを述べてみたい。

序章「イデオロギーとしてのリアリズム」は、いわば総論にあたる部分である。日本近代におけるリアリズムの変容を自然主義から説き起こし、ルカーチや福本和夫が言う物象化という問題に自然主義は、主体としての作家意識が客体としての現実を単に対象化するだけで断絶状態にあつたとする。これに対し、プロレタリア文学は「階級という概念によつて、両者の止揚という形で実践的に把握しようとした」。「プロレタリア文学によつて明らかにされたのは、リアリズムが単に現実認識や創作の手法に関する議論だけでなく、知識人の主体認識および主体構築に関わる言説でもあつたということをまず確認しておきたい」とする著者のことばは、本書が何を論じているかを端的に提示している。

白樺派における知識人と民衆、階級意識の抜きがたい宿命性を問題にしながら、プロレタリア文学において「意識としての天皇制」こそが文学的課題とされなければならなかった点を鋭く指摘しているが、以後この問題は継続して詳述されることがない。

一方、いわゆる大衆化論争にかかわり、リアリズムとは主観的でもあり意識と現実を重層的に統一するものとして、組織論と不可分の関係から、日本では組織改変のたびに新たなリアリズム論が提唱されたという指摘は新鮮である。大衆という現実が真に大衆になるには「芸術によつて表象されなければならない」という中野重治の確たる認識への論及ほか、すでに序章でも教えられるところは多々あるが、あとは「諸作家のリアリズム理論への距離を測定」している各章に移りたい。

第一章「物象化へのあらがい」は、主に佐多稲子の「キヤラメル工場から」を論じている。これまで多くの研究者が論じてきた作品であるが、著者はまず新聞や資料を博搜し、佐多が少女時代働いていたキヤラメル工場の実在を証明し、「女工募集」の新聞広告を発見して、小説の背景を確定しながら、同時に物語をたどつて「機械化」「商品化」される少女たちの「身体」を焦点化する。この作品はたしかに「プロレタリア・リアリズム」以前の、きわめて素樸な描写手法によつて描かれた作品」に違いないが、労働の実態や立ちいかない主人公の家族の姿が、強いリアリティをもつて描かれる、ということは従来からの評価であった。それを超えて著者独自の分析としては、マルクスの言う生産諸関係に

おける物象化理論を援用し、主人公の日常描写とその涙こそが、自らを「商品」としている社会構造、すなわち非情な物象化への抗いとその感情を表現しているところとらえている。このような正面からの論証は、非常に説得的である。さらに続編「彼女等の会話」では、すでに組織論のイデオロギーが「注入」されるが、その「定跡」によつて書かれていないとする梶井基次郎の時評をデコにし、作者における現実意識と階級意識の間での「主体構築」の困難性を指摘しているのも、新しい論点であろう。

第二章「プロレタリア文学の射程」は、葉山嘉樹「淫売婦」をとり上げ、人間社会に（地獄）を垣間見る物語の中に、プロレタリア文学が描く「身体」を分析している。主人公がはじめ性の対象とした穢れた女は、実は「被搾取階級の一切の運命を象徴する」「殉教者」だったという「発見の物語」、この従来の解釈を超えて著者は、先行研究を批判的に継承しながら、労働者階級以前の最底辺にいる男たちと主人公の連帯が、「蟹工船」における組織化による「ままならぬ身体からの解放」と異質のものだとと分析する。さらに「極限の状況に置かれた他者の身体を前にして、しかもその身体が自らの欲望の対象となりうるとき、いかに行動すべきか」という問題、すなわち後年の「愛情の問題」などに直結するところの、個人感情を階級的運動の中に解消してしまつた知識人の運動への反措定として「淫売婦」があることを提示している。あるべきプロレタリア文学像を性愛という身体性からみる視点が確立されている。

第三章「感情と階級意識」は「怒り」である。久米正雄の小説「萬年大學生」を批判した中野重治の詩「萬年大學生の作者に」における「怒り」の原点が何であるか、モデルとされた「京都学連事件」（治安維持法適用第一号）に関する諸メディア言説空間の抑圧性の問題を通して、中野の詩の価値を論じている。旧友が学連事件に連座したこと知った久野（久米）はかすかな同情心を起こしながら「微苦笑」をもって自己の心情を和らげる。この「微苦笑」とは、つねに彼が問題のありかを回避曖昧にし、無化するレトリックだというのはこれまで共有された見方である。中野はその点に敏感で、「それは君の差し入れを必要としない」「臭い作家よ／臭い萬年小僧よ」と厳しく批判したのであるが、さらにこの詩が、事件内容への無知に加え、勝手な推測で「常識的な無批判な非難」をくり返す識者たちの抑圧的言論状況を撃つ一矢になっていることを論証している。

階級闘争の中に変革主体の意識革命が進行するという福本イズムに影響を受けた中野は、福本理論を乗り越え、意識の社会的存在の具体を表象することが芸術の課題だと認識した。労働者の「悲鳴・号泣・闘争」の意識過程を通して、「芸術大衆化論争」以前、あくまでも知識人の主体変革をめぐる組織論に苦闘した中野の姿が浮き彫りにされる。

第四章「組織論とリアリズム」は、小林多喜二作品を論じた章である。描かれる工場とは、一九二〇年代後半から三〇年代にかけて「日本型フォードイズム」導入による「生産形態の新局面を

背景とした、支配的イデオロギーに対する労働者階級の新しい文化・生活・意識形態の創造をめざすヘゲモニー闘争の場」だったという認識から著者は出発する。「工場細胞」では、労働者への身体・意識に及ぶ権力支配が、「オルグ」では、活動家たちの身体（意識）をめぐるヘゲモニー闘争が描かれたと、グラムシや「ハビトゥス」理論を応用して論じる。一方、貴司山治は多喜二と並行して、独自に「英雄主義」を前面に据えて労働者大衆の感情に受容される作品を書いたが、それは一面では蔵原に代表される組織論と結びついた「科学的リアリズム」支配に抗する両者の試みであったと見る。

「党生活者」は、従来私小説として身体的リアリティーをもって読まれていた。しかし、ここでは作家主体の分裂を論じ、梶井基次郎から「シンパサイザー小説」として評価された淀野隆三の「一年の記録」の分析・対比を通じ、「階級の感情の」「形象化」問題で「党生活者」を批判的に取り扱っている。やがて、淀野の小説の背景には、ナツプの指導理論をめぐる混乱があつたことが指摘されるが、運動面からの評述がほしいとも思った。

また、虐殺直前の多喜二の姿を描いた貴司山治の小説「子」にも注目し、党組織のリアリズム論に呪縛された「党生活者」という作品にない「アクチュアルな」多喜二を形象化していると指摘する。貴司は生活現実根ざした実感から出発し、「自らの身体性を通過させ」たというが、「子」一編による対比・論証には、やや物足りなさを感じた。

第五章「社会主義リアリズムの行方」は、ナツプ解体後の日本における社会主義リアリズムの問題、とりわけその提唱者の一人である森山啓を批判的に摂取して、組織を失った運動を「プロレタリア・ジャーナリズム」での闘いに置換していく道を選んだ窪川鶴次郎に焦点を当てた論である。窪川は蔵原惟人のレアリズム論における創作方法の問題を鋭く指摘し、状況とはなれて自己内面化する作家たちと通俗化する文学状況に立ち向かっていったという。すなわち当時、四人称・饒舌体・社会化された（私）という創作方法を「文学主義」（戸坂潤）における通俗化、意識の緩みと見て、それに批判的だった窪川は、作家の現実認識の深さ、意識と現実の相互交流、そこから生まれる思想、そして「生きた人間」が「如何に描かれているか」、すなわちいかに「身体」を通じて作品が創造されているか否かを重要視する。運動再建に孤軍奮闘する窪川の理論的達成に、著者は丁寧な論理展開と文学状況への目配せをしながら、プロレタリア文学の未来像と戦後の社会主義文学運動にも耐えうる地点を見ると、高い評価を与える。筆者も、たとえば芸術的価値論争への窪川の理解はすぐれたものだ、かねてから思っていたのでこの評価は同感である。また、ここに各章に通底するプロレタリア・リアリズム論のあるべき方向性を、著者は暗示していると考ええる。

以上が本書の内容だが、こう見てくると時系列的に作品、作家を配しているが、プロレタリア文学史論の書ではないのは明らかである。では何をということになるが、端的に言えば蔵原惟人や

コミンテルンなどに代表される移入マルクス主義及びテーゼを基盤とした運動方針に翻弄された文学理論（リアリズム論）に反発、逸脱、超越し、いわば脱規範化した「身体」を表象する作品群の発掘、評価によって、「リアリズムのイデオロギーとしての動態を浮き彫りに」（序論）した点に本書の特徴があるといえる。そしてその際、評価のよりどころを「身体化されたリアリティー」に求めていることは、見てきたとおりである。誤解を恐れず言えば「ことばのまえに身体ありき」の姿勢である。具体的にはそれぞれに涙、性愛、怒り、生活実感などの表象を通して、作家たちのリアリズムの試行・実践を多面多角的に分析し、その可能性を模索し、研究の新地平を切り開いているのである。

佐多稲子がキャラメル工場をやめてほかの下働き労働をしているところ、大杉栄は自らの民衆芸術論で何よりも「労働者との一体的感情」を大事にして憎悪美・反逆美を描くよう主張した。これも身体的リアリティーにまつわる言説である。それから九〇年以上が経過しても、リアリズムの問題はいまも問われるべき課題であることを、本書は教えてくれる。

最後に枝葉にわたるが、引用文が旧漢字（正字）のままで表記されているが、そうあるべき字が所々新漢字になっており、むしろ新漢字で統一してもいいのではないかと思っただ次第である。

（風間書房 二〇一三年七月三一日発行 A5判二八一頁 本体価格六五〇〇円）

（おおわだ・しげる 法政大学非常勤講師）